

筑波大学審査学位論文(博士)

論文題目：男性役割態度の多側面的検討——4領域モデルの提唱——

人間総合科学研究科心理学専攻

氏名：渡邊 寛

論文要旨

2010年代、「男性の生きづらさ」に関する報道や評論が相次いでいる。それらの指摘から、「男性の生きづらさ」の原因の1つとして、男性役割があると考えられる。男性役割については、これまで複数の尺度研究を通じて検討されてきた。また、性役割研究において、性役割態度に影響する要因が検討され、性役割態度や性役割期待が対人関係や精神的健康に及ぼす影響が検討されてきた。しかし、これまでの先行研究には、以下3点の問題点が考えられた。

第1に、伝統的な男性役割と新しい男性役割が整理されていなかった。海外の先行研究では、伝統的な男性役割の側面を複数の因子から測定しており、因子間で、内容が重複している尺度も見られた。日本では、「男性性」という1因子で測定されることが多かった。新しい男性役割についても、複数の因子が抽出されたり、複数の内容から測定されていたが、それらが網羅的に把握され、整理されてはなかった。よって、男性役割の各側面を整理し、改めて尺度を作成することで、男性役割の構造や特徴をモデル化する必要があると考えられた。

第2に、男性役割の構造を踏まえて、男性の男性役割態度がどのような要因により影響されるのかが明らかではなかった。先行研究では、性役割態度と、親子関係や恋愛関係、社会的属性などとの関連が検討されてきた。しかし、多くの先行研究では、「男は仕事、女は家庭」というように、男性役割と女性役割を一緒に捉え、性役割態度を伝統-平等の1因子で測定していることが多かった。よって、男性役割の側面を明らかにした後、それらの側面を独立して測定し、改めて、様々な要因の影響を検証する必要があると考えられた。

第3に、男性役割のどの側面が関係性に影響するかや、男性が男性役割をどのくらい求められ、関係性や精神的健康にどのような影響があるのかは、統合的に明らかになっていなかった。男性役割による葛藤やストレスの研究では、誰から男性役割を求められるのかについては、検討されてこなかった。他方、対人関係の研究においては、性役割態度も伝統-平等の1因子で捉えていた。よって、男性役割の構造を踏まえて、男性の男性役割態度や他者からの男性役割期待・要求による、対人関係や精神的健康への影響を統合的に明らかにする必要があると考えられた。

本論文では、以上の問題点を踏まえ、以下の3点を検討した。第1に、伝統的な男性役割と新しい男性役割の側面を整理し、各態度尺度を作成して、2つの男性役割の関係や特徴を

検討した。第 2 に、男性役割の構造を踏まえて、男性の男性役割態度がどのような要因に影響されるかを検討した。第 3 に、男性の男性役割態度と、他者からの男性役割期待・要求により、男性の対人関係や精神的健康にどのような影響がみられるのか検討した。第 2、第 3 の目的においては、親子関係、恋愛関係、職場での人間関係、夫婦関係を取り上げた。

研究 1 では、伝統的な男性役割に関して検討した。研究 1-1 では、国内外の 13 尺度を整理し、伝統的な男性役割が「社会的地位の高さ」、「精神的・肉体的な強さ」、「作動性の高さ」、「女性的言動の回避」、「女性への優位性」の 5 側面から成ることを明らかにした。この結果を踏まえて、研究 1-2 では、5 側面に沿った伝統的な男性役割尺度を作成した。研究 1-3 では、同尺度の基準関連妥当性を検討し、5 側面すべてにおいて、平等的な性役割態度と負の関連がみられた。研究 1-4 では、同尺度の再検査信頼性を確認した。

研究 2 では、新しい男性役割に関して検討した。研究 2-1 では、自由記述調査を行い、新しい男性役割の側面を探索的に検討した。この結果と先行研究から、新しい男性役割に関する項目を作成し、研究 2-1 で、新しい男性役割尺度が「女性への気遣い」、「家庭への参加」、「他者への配慮」、「強さからの解放」の 4 因子から成ることを明らかにした。この結果をもとに、研究 2-3 で 4 因子各 4 項目から成る新しい男性役割尺度を作成し、基準関連妥当性を検討した。平等的な性役割態度との関連は、「女性への気遣い」において負の関連がみられ、「家庭への参加」、「強さからの解放」で正の関連がみられ、「他者への配慮」で無関連であった。研究 2-4 では、同尺度の基準関連妥当性を再確認し、再検査信頼性を確認した。さらに、伝統的な男性役割の 5 側面と新しい男性役割の 4 側面をまとめると、男性役割が、「仕事と家庭の領域」、「心身の強さの領域」、「望ましい人間のあり方の領域」、「女性への振る舞い方の領域」の 4 領域から成るとモデル化した。

研究 3 では、以上の男性役割を意識した時の認知や感情について、面接調査により探索的に検討した。その結果、男性役割を意識した時の認知や感情は、「消極的受容」、「肯定的感情・取り入れ」、「否定的感情・拒否」の 3 種類あることが明らかになった。また、得られたエピソードのうち、自分で意識したエピソードが全体の 59.9%であり、他者から求められたエピソードが 40.1%であった。自分で男性役割を意識すると、肯定的に感じ受容しやすい一方で、他者から男性役割を求められると否定的に感じ、拒否しやすいことが示唆された。

研究 4 では、男性の男性役割態度や他者からの男性役割期待と、男性の対人関係や精神的不健康の関連を検討した。研究 4-1 では、男子大学生の男性役割態度と親子関係に関して検討した。男子大学生の男性役割態度は、父親の学歴や働き方、母親の伝統的な男性役割期

待により影響を受けていた。また、本人の「作動性の高さ」は、親との関係を良好にしていた。一方で、母親の伝統的な男性役割期待を感じるほど、母親との関係満足度を低下させ、精神的な不健康を高めていた。研究 4-2 では、男子大学生の男性役割態度と恋愛関係に関して検討した。男子大学生は、概ね恋人の期待に沿った男性役割態度を有していたが、結婚可能性が高いほど、男子大学生は、恋人からの伝統的な男性役割期待も新しい男性役割期待も感じ、伝統的な男性役割態度に対して肯定的であった。また、本人の「強さからの解放」は、恋人との関係を良好にしていた。研究 4-3 では、働く男性の男性役割態度と職場での人間関係に関して検討した。その結果、働く男性の男性役割態度は、男性本人の年収や勤務時間、役職の有無だけでなく、組織風土の影響を強く受けていた。また、本人の「社会的地位の高さ」や「他者への配慮」は、職務肯定感を高め、本人の「女性的言動の回避」や「女性への優位性」、「家庭への参加」、「強さからの解放」は、上司への不信感や職場での居心地の悪さを高めた。さらに、年齢や男性役割態度の如何に関わらず、上司から男性役割を強く求められていると感じると、男性は、職務肯定感を低め、上司への不信感や職場での居心地の悪さを高め、精神的な不健康を高めていた。研究 4-4 では、有配偶男性の男性役割態度と夫婦関係に関して検討した。有配偶男性の男性役割態度は、妻の就業形態や年収に影響されていた。また、夫婦関係満足度は、「家庭への参加」や「強さからの解放」に肯定的で、「女性への優位性」に否定的な態度を有する男性ほど、高かった。「強さからの解放」は、精神的な不健康を高めていた。さらに、年齢や男性役割態度の如何に関わらず、妻から夫や父親としての役割を強く求められていると感じていると、夫婦関係満足度が低下し、精神的な不健康を高めていた。

研究 5 では、2 つの男性役割の特徴を改めて検討した。研究 5-1 では、伝統的な男性役割や新しい男性役割への態度の全体的な傾向を検討した。その結果、どの年代でも、弱さを見せたり他者に配慮する男性役割に肯定的である一方、どの年代でも、家庭参加には否定的であり、上の年代ほど、強さや女性を引っ張る男性役割に肯定的であった。2 つの男性役割の関係に関しては、両立、相反、無関連の 3 種類がみられた。研究 5-2 では、朝ドラにおける男性の描写から、社会における男性役割の表れ方を検討した。その結果、全体としては、強さやリーダーシップを発揮する男性が多く描かれていた。また、2010 年代の朝ドラに登場する壮年男性では「家庭への参加」が多く、若年男性では「女性への気遣い」が多かった。このほか、夫や恋人で「女性的言動の回避」、「女性への優位性」、「女性への気遣い」が多く、息子や兄弟で「精神的・肉体的な強さ」や「強さからの解放」が多かった。これらの結果か

ら、男性役割の各側面は、一定程度、社会を反映していると推察された。

以上の実証的検討から、本論文では、男性役割態度の構造と機能をまとめた以下の 4 領域モデルを提唱した。男性役割は、伝統的な男性役割の 5 側面と新しい男性役割の 4 側面をまとめた 4 領域から成っている。これらの男性役割への態度の多くの側面に影響するのは、母親の期待や恋人との結婚の可能性、組織風土である。各領域における男性役割態度の関係は、両立、相反、無関連の 3 種類ある。「仕事と家庭の領域」では、2 つの男性役割態度が両立し、かつ職場において異なる影響がある。「心身の強さの領域」では、「女性的言動の回避」と「強さからの解放」は、独立しているが、どちらの男性役割態度も、公的場面でネガティブな影響がある。「望ましい人間のあり方の領域」では、2 つの男性役割態度が両立し、社会人男性においては、他者への配慮が仕事の肯定感に結びついている。「女性への振る舞い方の領域」では、2 つの男性役割態度が両立し、どちらも職場や家庭においてネガティブに機能している。同モデルに基づけば、男性は、異性や働く組織の影響を受けて多くの男性役割を志向し、公的場面でジレンマを感じたり、公私ともに対人関係を悪化させるために、生きづらさを感じると考えられる。

最後に、研究領域への貢献と社会的含意、限界と今後の展望が議論された。

(3,990 文字)